

# 三原事業所における東日本台風災害 への初期の対応について



群馬県中之条土木事務所三原事業所工務係長

ささかわ とおる  
笹川 徹

## 1. はじめに

わたしの勤務する三原事業所は、群馬県の北西部を管轄する中之条土木事務所のさらに出先として、嬭恋高原キャベツの嬭恋村と草津温泉の草津町を担当している。県境に位置し中山間地域で険しい地形、積雪地域、人口もわずかであるが、他県の人々が持つ群馬県のイメージに対するウエイトは、相当に大きいという誇りと使命感をもって職務にあたっている。

主要幹線道路である国道144号は、かつて六文銭の真田氏が支配往来した歴史街道であり、これに沿うように一級河川吾妻川が流れ、下流には国家プロジェクトとしてようやく完成した八ッ場ダムがある。このダムを一晩で満水にした雨により激甚災害をもたらした令和元年東日本台風災害において、県内最大の被害を受けた事業所が、発災直前から段階的に強化支援され復旧が動き始めるまでを振り返ってみたい。

事業所では災害復旧73箇所と災害関連事業2箇所を行うこととなったが、約1年半が経過し全ての発注が完了、慢性的な現場作業員不足の状況なもの、緊急度の高いもの(写真-1、2)が完成しつつある。

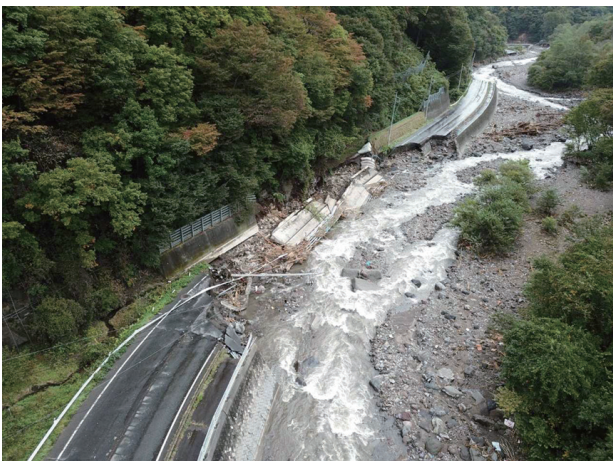


写真-1 国道144号道路消失区間の被災直後の状況

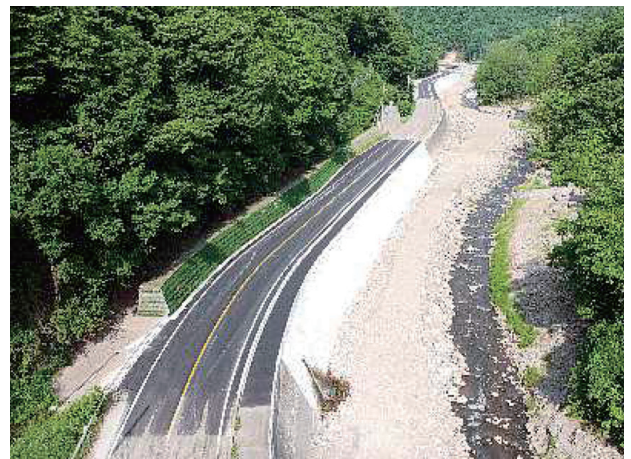


写真-2 国道144号道路消失区間の現在の復旧状況

また、身の危険を感じるほどの災害に際し、この地域が1名の死者も出さなかったのは、厳しい自然条件の中で育まれた防災意識、団結心、開拓者精神というか地域自治の力によるものなのだと、地権者をはじめとする地元の方々と接する中で感じている。

## 2. 初動対応

事業所の所員は5人(担当職員3人)、道路から砂防までの全てを担当する地域割の体制となっている。台風19号の接近により10月12日から、水防マニュアルどおり他の事務所(八ッ場ダム水源地域対策事務所、上信自動車道建設事務所)から2人の応援が加わり、2班の24時間交代勤務体制を取れるよう強化された。

この日9時頃から雨は強まり、13時40分、めったに達することのない国道144号の事前通行規制雨量(連続180mm)になったことから、すぐにその対応(車両追い出し、警察との立会、閉鎖)を開始する。事業所からは15分程度なのですぐに駆け付けることができ、14時より通行規制となった。貴重な資料となる河川の増水状況(写真-3)を写真に収めながら



写真-3 写真-1奥の村道橋から(通行規制時)



写真-4 国道144号(事業所→村役場間)の土砂流出

事業所に戻る予定としていたが、県道からの水が別荘地に流入すると現場に向かうため、大きく迂回して事業所に戻る。16時20分、国道144号鳴岩橋が落橋との連絡が応急対策をしてくれていた建設会社からある。翌日の調査でわかるのだが、この通行規制区間内の数箇所でも道路が消失する被害が発生しており、予定どおり引き返していたら道路と共に流されていたのではないかと、また、この通行規制が遅れていたら一般通行者への被害が発生していたのではないかと、恐ろしくなった。

事業所長の判断により、倒木や流出土砂撤去をしてくれていた建設会社にも安全な場所に避難するよう指示が出された。事業所は、小学校、高校、中央公民館と共に三原集落の中にあり、吾妻川の川岸に30歩もあれば降り立つことができる。深夜になっても雨は降り続き、濁流の音に加え、地鳴りのような音と震動(翌朝対岸斜面が大きく崩壊しているのを確認)が起き、相当な被害が出ているだろうことを肌で感じる一夜となった。

### 3. 応急対策と災害調査

明るくなり主要道路の調査をしたところ、あらゆる所で土砂流出や倒木が発生し、村役場(車で10分程度)にも土木事務所(車で45分程度)にも行けないという孤立状況(写真-4)となっていた。群馬県建設業協会吾妻支部との災害協定に基づき、緊急会議を招集、対応箇所、作業を確認の上、応急対策を開始。事業所管内建設会社だけでは足りずに支部全体の建設会社も応援に駆けつけてくれ合計17社で行うことになった。

災害調査にあたり、県庁や他の土木事務所で予め決めてある職員の中から6人が抜擢され、さらなる

体制の強化が図られた。事業所一丸となって取り組めるように、地の利のある事業所の職員とペアを組む形で4つの調査班が編成された。机やパソコンを事務室に詰め込み、LANケーブルをたこ足配線して、窮屈ではあるがなんとか業務を進められる状態とした。

期限までに行う災害報告のため、災害箇所の洗い出しを行うのに平行して、群馬県測量業協会との災害協定に基づき、県内の測量設計会社12社による調査、設計が開始された。応急対策してくれている建設会社や測量設計会社、町村等から被災状況写真、ドローン映像、測量データが次々に事業所に集まってきた。村の課長さん(たまに村長さんも)がほぼ毎日訪れてくれ、情報提供や地元との調整を補助してくれた。これらの情報を一刻も早く県庁ネットワークに取り込み共有をしなければならなかったが、県庁ネットワークのセキュリティが強化されていたため、外部データの取り込みに時間を要する状況があった。一時的なセキュリティ解除を担当課に要請したところ、万が一ウイルスが侵入したら責任が取れるのかということにやっぱりなる。最終的には県庁セキュリティに問題がないような対応が考えられ(多少の時間はかかりますが)問題はなかったところですが、様々な作業を行う必要があり、時間もない中、速やかな意思決定のため土木事務所長が事業所にほぼ常駐され「何かあればわたしが責任取りますよ。」と後押ししてくれた。

### 4. 被災の実態と国の支援

管内のあらゆる所に被害が及んでいたが、ここからは、特に被害の大きかった長井川原地区周辺の国道144号と平行する吾妻川の約3kmに及ぶ状況



写真－5 長井川原集落の瀬替え状況

を紹介する。

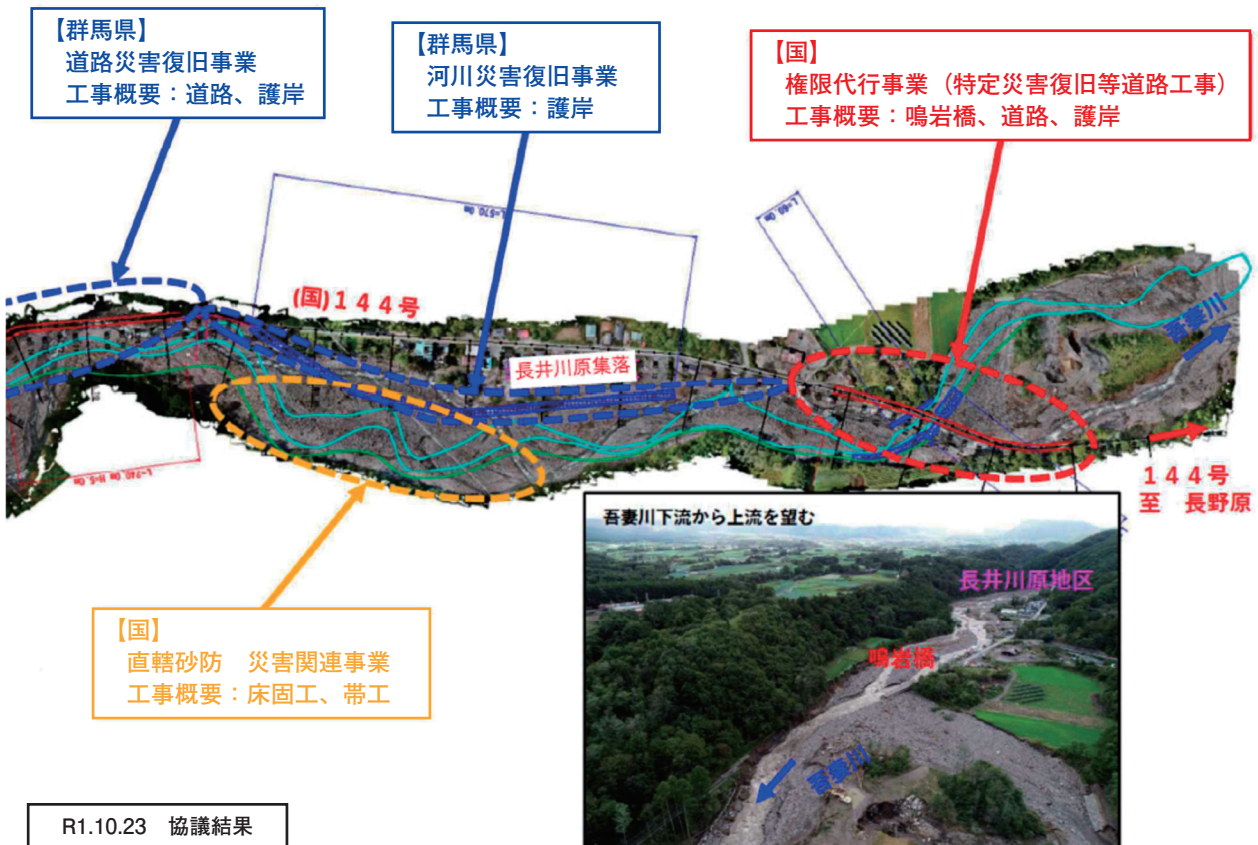
鳴岩橋の落橋に加え道路自体の消失が4箇所、吾妻川の護岸、集落の自動車整備工場等が倒壊するという壊滅的な状況であった。集落から3方向に通じてた道路と共に、電気、電話といったライフラインも寸断され孤立状態となっており、復旧には相当な事業費と期間を要することが想像でき、はたして県

だけでできるのだろうかと心配になるほどであった。まず、県では吾妻川に削られた集落を守るための背替えを開始(写真－5)、村では村道の開通作業が迅速に行われ、ひとまず孤立状態は解消された。

並行して測量設計会社でドローンによる3次元測量を行い、わずか3日で最新の写真平面(写真－6)、縦横断測量データを得ることができ、現地確認による成果も合わせて被災流量や河道計画の検討が進められた。これら成果に基づき、国をはじめとする関係機関との協議が行われていくこととなる。

10月15日より国の支援機構であるテックフォースが、2～3班体制で駆けつけてくれていた。手狭ではあるが事業所の会議室で活動してもらうこととした。何をしてもらうのがよいのか悩むところもあったが、被災の大きさを地方整備局に伝えてくれたらしく、国土交通省高崎河川国道事務所が直轄権限代行事業として、一番大規模となる鳴岩橋区間の復旧を受けてくれることになった。また、同利根川水系砂防事務所が集落区間に直轄災害関連緊急砂防事業を実施してくれることになった。方針を決定す

**(国) 144号・(一) 吾妻川 長井川原地区(嬭恋村大笹地内) 災害復旧事業区分**



写真－6 災害復旧役割分担表



写真-7 国による緊急迂回路  
(落橋した鳴岩橋の代替道路)

る会議にて「今のところ群馬県の検討が一番進んでいるのでこのペースを落とさずに走りながら引き継ぎをしてほしい。」との言葉があった。降雪時期が間近に迫っており、唯一の集落へのアクセス路となる村道だけでは厳しい中、鳴岩橋落橋区間に対応する緊急迂回路が、高崎河川国道事務所による昼夜を徹した工事により12月末に完成した。そのスピードと規模感は圧倒的で、これは県ではちょっと実現不可能という感じであった(写真-7)。

## 5. 事前着工と資材確保

管内の土砂撤去や背替え等の応急対策は、結果1億円を超えるものとなった。しかし、本復旧という大きな岩も転がさなければならない。韋駄天のように全力疾走で作られたホカホカの設計書で、災害査定を待たずに工事発注することとし、主管課がかき集めたすぐに執行可能な予算内で、住宅の倒壊の危険がある急傾斜地施設災害復旧、国道144号道路消失区間の道路災害復旧を優先し工事を発注した。事前着工できたのは、この復旧区間のほんの一部であった。

この区間の復旧の主要資材は大型積ブロックであり、メーカーが在庫を多く抱えているものではないこと、周辺の県でも同様の需要が想像できたことから、一刻も早く製造にとりかかる必要があった。しかし、何の担保もない状況でメーカーに製造は依頼できず、せめてこのような大規模な現場があるとPRするに留まった。資材確保の面からは全区間での事前着工が望ましい状況であったが、事業規模が大きくなれば決裁までの手続きが増え、どうしても時間がかかるというのが一般的である。激甚災害事務所における緊急予算確保、一時的な予算執行限度額の拡大といった柔軟な対応の必要性を感じている。

## 6. おわりに

群馬県にはたくさんの分野に及ぶ土木事業の予算をはじめとする執行状況を、県庁の各主管課と出先機関で共有できる事業管理システムが構築されている。これには、三原事業所のような少人数出先を可能にしているという一面があり、現在、全庁的に進められているDXにも通じるものがあると理解している。

今回、三原事業所は激戦地での出丸、そう「三原丸」であった。現場での総大将の適切な采配、段階的人員の強化、情報の伝達、必要物資の調達、国や建設、測量、設計会社という強力な援軍、地元の方々の協力、そして十勇士(担当職員)の働き、すべてがかげがえのないものであった。このように振り返っていると、三原丸のこれまでの面々が奮闘していた情景がよみがえり、心打たれる気持ちになる。勝ち鬨を上げるまであと少し、引き続き一丸となってこの災害復旧を完成させたい。